



東京都子供読書活動推進資料

乳幼児おはなし会 ハンドブック



東京都立多摩図書館

はじめに

『乳幼児おはなし会ハンドブック』は、東京都立多摩図書館の実践を元に、乳幼児おはなし会の基本的な考え方や運営についてまとめたものです。

東京都立多摩図書館では、平成15(2003)年度に0歳から3歳までの子供とその保護者を対象とした乳幼児おはなし会を開始し、わらべうたと絵本の読み聞かせを行ってきました。

17年の間に担当者は何度か変わりましたが、おはなし会を行うに当たって大切にしてきたことは変わりません。わらべうたと絵本を通じて、子供と身近な大人が目と目を合わせて触れあうこと。子供がたっぴりと言葉をかけてもらうこと。子供が楽しみ、遊ぶ姿から、大人自身もまた言葉の面白さや心地良さを学ぶことです。これらを繰り返し行うことが、子供と大人の絆を一層深め、子供が言葉の世界へ入っていくための助けとなることをどの担当者も実感してきました。

この冊子は、これからおはなし会を始めようと考えている図書館や、初めておはなし会を担当する図書館員の皆さんのための手引きです。

東京都立多摩図書館の実践が、より良いおはなし会を行う一助になれば幸いです。

目次

おはなし会を始めましょう！

乳幼児おはなし会の目指すもの	2
おはなし会を計画する	3
プログラムを考える	7
①大切にしたいこと／②わらべうた／③絵本	
当日までの準備	16
おはなし会の進め方	18
子供と接するときの心得	20
保護者への働きかけ	22

都立多摩図書館の実践から 登録制乳幼児おはなし会

乳幼児おはなし会の歩み	26
登録制乳幼児おはなし会を実施して見えてきたこと	28
都立多摩図書館のプログラム例	32
参加者の変化の事例	40
Q & A	44

資料編

わらべうた／絵本／理解を深める本	46
------------------	----

凡例

⇒の後ろには関連するページを示しています。

おはなし会を始めましょう！

乳幼児おはなし会の目指すもの

この冊子で扱う乳幼児おはなし会とは、0歳から3歳までの乳幼児とその保護者を対象に、わらべうたと絵本の読み聞かせを行う会を指します。

乳幼児おはなし会では、子供と保護者の双方がわらべうたや絵本を通じて触れ合い、楽しむことが最も大切です。言葉や本の持つ力を子供が感じるためには、それを共に楽しんでもくれる大人の存在が不可欠だからです。

子供は、身近な大人と視線を交わし、体に触れてもらい、たっぷりと言葉をかけてもらう中で、言葉に対する感覚を身につけていきます。そして、人からかけられる言葉に自然と耳を傾けるようになり、やがて絵本の読み聞かせも楽しめるようになります。保護者がこのような子供の変化を実感すると、わらべうたや絵本への関心がより一層高まり、家庭でもわらべうたや絵本を通じたやりとりが増えていきます。

乳幼児おはなし会では、わらべうたや絵本の魅力を伝えるだけでなく、図書館で過ごす時間が良いものだと思えるよう働きかけることも大切です。おはなし会をきっかけに、本や図書館を身近に感じるようになった子供や保護者は、図書館を日常的に利用するようになります。

図書館で行う乳幼児おはなし会は、将来にわたる継続的な利用者を育てるサービスでもあるという意識を持って取り組みましょう。

おはなし会を計画する

おはなし会を始めるとき、最初に考えるべきことは「どのような会にするか」です。乳幼児おはなし会を行う目的は何か、自館のサービスの中でどのような位置づけなのかを考え、会の運営方法を検討しましょう。

検討する際には、次のような条件と照らし合わせていきます。

担当者・参加人数（定員）・対象年齢・実施方法・開催日時・所要時間・会場

担当者

乳幼児おはなし会には、できる限り同じ担当者が続けて関わるようにしましょう。あまり頻繁に担当者が変わると、継続して参加する子供も保護者も、人や場に慣れることができません。

おはなし会での参加者の反応や変化は、乳幼児サービスを考える上で、貴重な財産となります。ボランティアスタッフなどが会を担当する場合でも、会の内容や出来事を図書館職員と共有できる体制を整えておきましょう。

⇒ p.19「記録を残す」

参加人数（定員）

乳幼児は、多くの人が周囲にいと会に集中できません。また、参加人数の多さに圧倒されて泣いてしまう子供もいます。そのような状況では、子供も保護者も楽しめたという実感を抱けません。担当者が子供や保護者と視線を交わし、やりとりできる程度の人数が適切です。取り組みやすいのは10組20人程度までと考え、多くても、20組40人程度にとどめましょう。

対象年齢

乳幼児と一口に言っても、0歳児と2、3歳児では、楽しめることに大きな差があります。わらべうたの遊び方や、紹介できる絵本も違ってきますから、年齢・月齢によって会を分けても良いでしょう。

当館では、対象年齢別に二つの会を行っています。0歳3か月から1歳半までの子供が参加する会では、主にわらべうたを、1歳半から3歳までの子供が参加する会では、わらべうたと絵本を楽しんでいます。

実施方法

乳幼児おはなし会には、大きく分けて三つの実施方法があります。

自由参加制

- 当日、会場に来た参加者を対象に行います。
- 直前まで参加者の人数や年齢・月齢が分からないため、最も臨機応変な対応が求められます。
- 事前の申込が不要なので、初めての人も気兼ねなく参加できますが、継続的な参加者を得るには工夫が必要です。

事前申込制

- 1回ごとに、事前に申し込んだ参加者を対象に行います。
- あらかじめ参加者の人数や年齢・月齢を把握することができるため、参加者に合ったプログラムを考えやすくなります。
- 当日までにキャンセルがあった場合、事前申込者以外を受け入れるかをあらかじめ考えておく必要があります。
- 自由参加制と同じく、継続的な参加者を得るには工夫が必要です。

登録制

- 一定の期間や回数を設定し、事前に登録した参加者を対象に行います。
- 同じ参加者に継続して接することができるため、参加者の特徴や変化をつかみやすく、参加者に合ったプログラムを考えられます。
- 期間中にキャンセルがあった場合、途中からの参加希望者を受け入れるかをあらかじめ考えておく必要があります。

当館では、登録制のおはなし会を実施しています。

⇒p.26「都立多摩図書館の実践から 登録制乳幼児おはなし会」

開催日時

曜日や時間帯を決め、一定の頻度でおはなし会を行うと、保護者は継続して参加しやすく、子供は会に慣れることができます。期間が空きすぎたり、時間帯が毎回違ったりしないように気をつけながら、開催可能な日時を考えます。

実施する曜日によって、参加者層は変わります。

平日に参加できるのは、専業主婦（夫）や育児休業中の保護者が多く、参加者の日常のスケジュールに組み込みやすいため、土・日・祝日の実施に比べると継続的な参加が見込めます。

土・日・祝日の会には、平日に比べて、両親そろっての参加が多く見込めます。しかし、週末には、家族で他の外出の用事が入ることも多いため、継続的な参加を促す工夫が必要です。

当館では、乳幼児の生活リズムや保護者の負担を考慮し、隔週で水曜日の午前中に行うようにしています。

所要時間

おはなし会の時間が長すぎると、子供が最後まで集中できず、短すぎると、一つのわらべうたを繰り返し楽しむことができません。20分から40分程度で設定すると良いでしょう。

会場

参加者がおはなし会に集中できる場所について、事前によく検討しておきます。最も理想的なのは、会を実施できる別室があることです。

別室がなく、閲覧室の一部で行う場合には、少し手を加え、おはなし会を行いやすい環境に整えます。参加者が周囲の目を気にせず安心できるよう、簡便な仕切りを設けたり、書架など子供の注意を引くものに布をかけて目隠ししたり、それぞれの場所に応じて工夫します。

どの会場で実施する場合も、参加者の危険に繋がるものは撤去しておくこと、余分なものはできるだけ置かず、参加者が集中しやすい環境にすることが大切です。

新たに物品の購入が必要になることもあるため、会場設営については早めに考えておきましょう。

都立多摩図書館の会場作り

当館は、閲覧室の一部を会場にしています。最初は普段の状態で行っていましたが、子供が書架の絵本に気を取られたり、部屋から出て行ったりすることが頻繁に起こりました。そのため、現在は書架に目隠し用の布をかけ、入口に^{ついたて}衝立やブックトラックを置いています。また、子供を寝かせて遊ぶわらわうたを安全に楽しむために、床にラグマットを敷いています。



（普段の閲覧室の様子）



（おはなし会の設営後の様子）

プログラムを考える ①大切にしたいこと

おはなし会の実施が決まったら、プログラムを考えます。

まず、プログラムを考えるとときに大切にしたいことを紹介します。

たっぷり繰り返す

乳幼児にとって、繰り返しはとても大切です。

身近な大人と一緒に同じわらべうたを何度も楽しむうちに、子供はそのわらべうたのリズムや動きを受け入れていきます。そして、たっぷりと繰り返しを味わった子供は、お馴染みのわらべうたに期待の表情を見せたり、動きをまねしたりし始めます。新しいわらべうたを次々に取り入れるのではなく、一つのわらべうたを長い期間繰り返すようにしましょう。

よく知っている絵本は、子供にとって、親しい友達のようなものです。そのような絵本が登場すると、子供はいつも以上に瞳を輝かせ、何度も読むことを望みます。しかし、1回の会の中で同じ絵本を繰り返し読むことは難しいので、子供が気に入った絵本があれば、家庭で読むことを保護者に勧めたり、他の回で再び読むようにします。

おはなし会の「型」を作る

子供は繰り返すことで楽しみを深めると同時に、安心感も覚えます。一つのわらべうたを繰り返すことと同じく、おはなし会自体も、いつも同じ流れで繰り返すことが大切です。当館では、これを「型」と呼んでいます。毎回同じ型に沿って会が進むことによって、子供は会に慣れ、安心して参加することができるのです。

当館の1歳半までの子供が参加する会では、最初のわらべうた→顔遊びや手遊びのわらべうた（2、3曲）→体を動かすわらべうた（2、3曲）→子守歌→最後のわらべうたという型で進めています。1歳半以上の子供が参加する会では、最初のわらべうたの後と、子守歌の後に絵本の読み聞かせを行います。

おはなし会の型は、全ての図書館で同じである必要はありません。これまでおはなし会を実施する中で、出来上がってきた型があれば、それを続けていくのが良いでしょう。もしも、自館の型を見直したり、新たに型を考えたりする場合には、他の図書館のおはなし会の様子が参考になります。p.59で紹介している『乳幼児おはなし会とわらべうた』は、いくつかの図書館のプログラム例を掲載しています。

⇒p.32「都立多摩図書館のプログラム例」

子供の成長段階に合わせる

成長段階によって子供が楽しめるわらべうたと絵本は変わってきます。子供の発達についておおよその目安を知っておくと、参加者に合わせてプログラムを考えやすくなります。また、おはなし会の間に参加者に接するときにも安心です。

⇒p.9「プログラムを考える ②わらべうた」

p.12「プログラムを考える ③絵本」

p.32「都立多摩図書館のプログラム例」

p.46「資料編」

プログラムを考える ② わらべうた

わらべうたとは

この冊子で扱う「わらべうた」は、主に日本各地で口承により伝わってきた歌を指し、作曲者や作詞者がいる「童謡」とは区別して考えます。

わらべうたは、子供が遊ぶとき、または大人が子供をあやしたり、寝かせたりするときに歌い継がれてきました。日本語特有の心地良いリズムとメロディは、現代の子供にも大人にも自然と馴染みます。

わらべうたを取り入れるときのポイント

わらべうたを選ぶ

一口にわらべうたと言っても膨大な数があり、その中からプログラムに取り入れるわらべうたを選ぶのは難しいことです。

もともと、わらべうたは口承されてきたものなので、可能であれば、他のおはなし会を見に行ったり、勉強会に行くなどして、実際に歌い、遊んでみてから選ぶのが一番良いでしょう。それができない場合は、わらべうたの歌詞やメロディ、遊び方が紹介された本を参考に選びましょう。

⇒p.59「資料編 理解を深める本」

⇒p.46「資料編 わらべうた」

毎回歌うわらべうたを決める

おはなし会を始めるときにいつも同じわらべうたを歌うと、子供は自然と会に参加する気持ちの準備ができます。これまで述べてきたように、子供は繰り返すことに楽しみや安心感を覚えますから、いつも必ず歌うわらべうたを決めておきます。

発達に合った遊び方を知っておく

乳児期の初めの頃は、人に触れられてもあまり反応がありません。たくさん触られ、刺激を受けることで、子供は少しずつ笑い、くすぐったがるようになります。そこで、子供に繰り返し触れ、優しく刺激を与えるわらべうたをたくさん取り入れます。

1歳近くになった子供は、簡単な手遊びをまねできるようになります。また、保護者に体を揺すってもらったり、高く持ち上げられたりするわらべうたも少しずつ楽しめるようになります。

言葉を発するようになる頃には、やや複雑な動きをまねできるようになり、身近な大人に得意げに見せてくれるようになります。

わらべうたの中には、一つの節^{ふし}に対して複数の遊び方ができるものがあります。そのようなわらべうたをプログラムに取り入れる際は、子供の発達に合わせて、どの遊び方を紹介するかを考えておきます。参加する子供の年齢・月齢に幅がある場合、月齢の低い子供、高い子供それぞれに合った遊び方を伝えます。特に、大きな動きのあるわらべうたを取り入れるときには、首の座っていない子供に無理に同じ遊び方をさせず、しっかりと体を支えるように注意します。

⇒p.32「都立多摩図書館のプログラム例」

小道具を効果的に取り入れる

子供たちがわらべうたに集中できるよう、ごく簡単な道具を使うこともあります。布やお手玉、指人形、パペット、ボールなどを用いてわらべうたを歌うと、集中力の切れかかっていた子供の気分転換にもなります。

ただし、あまりに多くの小道具を使うと、出し入れが繁雑になり、かえって子供が集中しづらくなります。小道具はあくまでわらべうたの魅力を引き出すために使うのだということを忘れないようにしましょう。

練習する

参加者の前で落ち着いてわらべうたを歌えるよう、十分に練習を重ねておきます。

慣れないうちはわらべうたを覚えることに苦労するかもしれませんが、何度も繰り返すうちに自然と歌えるようになっていきます。練習をしてみて、メロディのあるわらべうたが難しいと感じたときには、まずはメロディのないものや、音域が狭いものを中心にプログラムを構成すると良いでしょう。

また、参加者に遊び方を伝える練習もしておくとう安心です。できれば他の担当者に見てもらいながら、会で手本用に使うぬいぐるみや小道具を用いて練習しましょう。

担当者間でわらべうたを共有する

おはなし会に複数の担当者がある場合には、全員が同じ^{ふし}節と遊び方が紹介できるように、担当者間で共有しておきます。

子供は「知っていること」に安心します。また、聴覚が鋭敏なので、大人が気づかないようなちょっとした変化を感じ取っています。いつも子供が安心してわらべうたを楽しめるよう、担当者によってわらべうたの^{ふし}節が変わったりしないように気をつけます。担当者同士で一緒に歌って確認したり、会で歌うわらべうたの歌詞と遊び方をまとめたノートを作ったりして、意識的に情報共有を行う必要があります。ノートには、わらべうたの掲載資料や習った機関名等も書いておくと、音程や遊び方に迷ったときや、担当者が変わったときに役立ちます。また、保護者からわらべうたについて質問されたときにも資料をすぐに提供できます。

乳幼児へ絵本を読むに当たって

ごく幼い子供にとっては、絵本はまだおもちゃのようなものです。ですから、担当者が読んでいる絵本の前で子供が興味を持って立ち上がったたり、ページをめくろうとしたりするのは、自然なことです。子供の反応にあせらず、1冊を読み通しましょう。子供は会の楽しみ方が分かったと、集団の中でも座って絵本を見るようになります。

ただし、参加する子供が幼く、用意していた絵本をまだ楽しめないと感じた場合には、予定していた絵本を無理に読まず、違うものに変える、わらべうたのみで会を構成するなど、臨機応変な対応を心がけます。

絵本の選び方

日頃、利用者に対応していると、乳児期からの絵本の読み聞かせに関する質問をよく受けます。新刊案内などを見ても、低年齢向けのいわゆる「赤ちゃん絵本」は絶え間なく出版されています。たくさんの絵本の中から乳幼児おはなし会でどれを読むか迷ったら、まずは次のような特徴を持つ絵本を選んでみましょう。

- テーマが幼い子供にとって身近である
- 絵や写真が魅力的で、離れても見やすい
- リズミカルな音や、繰り返しのフレーズがある
- 甘すぎる口調や省略した言葉ではなく、整った日本語で書かれている
- 絵と文が一体となって内容を分かりやすく伝えている
- 聞き手に安心感を与える展開である

数十年から半世紀近く読み継がれている低年齢向けの絵本は、どれもこのような特徴を持っています。そういった絵本を実際におはなし会で読むうちに、子供が絵本のどのようなところを喜ぶのかが分かり、次第に絵本を見る目が養われていきます。

⇒p.54「資料編 絵本」 p.32「都立多摩図書館のプログラム例」

絵本を取り入れるときのポイント

成長段階に合った絵本を選ぶ

まだ絵本に慣れていないごく幼い子供には、音の響きが楽しめるものや、読み手と簡単なやりとりができるもの、同じフレーズが繰り返されるものを選びます。

簡単な物語を楽しめるようになってきた子供には、上記に加えて、シンプルな筋^{すじ}で、話の展開の面白さを感じられるものも取り入れると喜ばれます。物語を楽しめるようになってきた子供に、音の響きや簡単なやり取りだけの絵本は、少し物足りないのではないかと思うかもしれません。しかし、実際に読み聞かせをすると、子供は響きを復唱したり、読み手の呼びかけに返す言葉を一生懸命考えたりと、その歳ならではの楽しみ方をします。

予備の絵本を用意しておく

事前に子供の年齢が分かっているときでも、実際の参加者の様子を見て、読む絵本を差し替えることがあります。ごく簡単な絵本から物語性のある絵本まで、予備を多めに用意しておき、子供たちがより楽しめるおはなし会ができるよう心がけます。

おはなし会までに考えておくこと

乳幼児に合わせた読み方

図書館では、絵本に描かれた世界を子供に伝えるために、文章どおりに読み聞かせを行うことが一般的です。しかし、乳幼児おはなし会では、幼い子供が絵本の世界を楽しめるよう、少し読み方を工夫した方が良いでしょう。

初めて絵本に出会う子供は、絵本を通して読み手とやりとりすることを喜びます。絵本の文章をそのまま読むよりも、子供の指差しや復唱に対して読み手がうなずき返したり、「そうだね」と同意するなど、子供に共感を示すことが大切です。

このように、子供に寄り添って読むと、想定よりも時間がかかります。プログラムを考えるとときには、本文をそのまま読む時間に加えて、子供とやりとりを楽しむ時間を見込んでおきましょう。

読む前の確認・読むときの工夫

始めから終わりまで絵本の魅力を損なわずに読めるよう、事前に確認します。注意が必要なものの例として、カバーに隠れた見返しにも絵と文がある絵本（『もこもこもこ』（⇒p.54））や、途中でページの向きを変えて読む必要がある絵本（『やさい』（平山和子 さく 福音館書店））などがあります。

また、選んだ絵本をどのように読むかも考えます。例えば、おいしそうな食べ物が出てくる絵本（『ぱんだいすき』（⇒p.55））であれば、読み終わってから一人一人の子供に絵を見せて食べさせるまねをしてみよう、どれが好きか聞いてみようなどと考えておきます。

練習する

乳幼児おはなし会では、以下のようなことに気をつけて絵本の読み聞かせができるよう、練習しておきます。できれば、実際におはなし会を行う会場で他の人に練習を聞いてもらいましょう。

- 新しい絵本はページが開きにくいいため、開きぐせをつけておく。絵本のカバーは、読んでいる最中に邪魔にならないよう外しておく。
- 子供から見やすい位置に座り、端や後ろに座っている子供にも絵本がしっかり見えるよう意識する。
- 子供の見やすい高さに合わせて、持ちやすい方の手で絵本を持つ。
- 開いた絵本の中央下部をしっかりと持ち、ページをめくるときに絵本がぐらぐらしないように気をつける。
- 表紙を見せて題を言い、見返し、標題紙を順番に見せる。
- 後ろの子供にも届く十分な声量で読む。
- 登場人物によって声音を変えるなど、過剰な演出はせず自然に読む。
- 早口になったり、文字の分かち書きのとおりを読んでぎこちなくなったりしないようになめらかに読む。
- ページがスムーズにめくれるように、読みながら次のページの端を持って準備をしておく。
- ページをめくったら、子供が絵を見られるように一呼吸おいて読み始める。文字のないページや短い文のページも、十分に時間をおいてからめくる。

やがて本格的な読書へ

子供は、読み手とやりとりをしながら絵本を楽しんでいくうちに、絵や物語そのものを味わえるようになります。そして、お気に入りの絵本をきっかけに、次第に読書の幅を広げ、ストーリーのある絵本や知識の絵本など、様々な本を大人と一緒に読むことができるようになっていきます。こうして本の楽しみを存分に知った子供は、自ら本を選び取り、本格的な読書に進んでいくことができます。

当日までの準備

プログラムが決まったら、おはなし会の準備にとりかかります。必要に応じて、それぞれの図書館でチェックリストを作り、準備に漏れがないようにします。

前日までに準備すること

☐ プログラムの最終決定

考えたプログラムについて他の担当者などと相談し、決定します。
併せて、自分なりの目標や、担当全体の目標を共有します。

☐ 備品の調達

会場設営に備品が必要な場合には、当日に間に合うよう調達します。

☐ 広報

プログラムを考えると同時並行で進めることもあります。

☐ ポスター掲示

☐ チラシ配布

☐ 図書館広報紙への掲載

☐ SNSなどでの情報発信

☐ 参加者への配布物、当日の案内掲示物の用意

作成し、館内で承認を得て印刷します。

☐ 絵本や小道具の用意

当日読む絵本や小道具を集め、状態を確認しておきます。

☐ 読み聞かせ用の絵本

☐ 貸出用の絵本

☐ 読み聞かせ用の予備の絵本

☐ 小道具（ ☐ 布 ☐ 指人形 ☐ お手玉 ）

☐ 手本用の人形

わらべうたの手本を見せるときに乳幼児サイズの人形があると便利です。

☐ プログラムの練習

担当者で顔を合わせて、わらべうたの^{ふし}節や遊び方の確認を行います。

絵本は、必ず声に出して読んでおきます。

当日、参加者が来館する前に準備すること

☐ 会場設営

参加者が安心して参加できる環境に整えます。

☐ 案内掲示

別室で行う場合は、会場の案内を掲示します。

閲覧室で行う場合は、他の利用者向けに、おはなし会の会場であることや、途中参加が可能であればその案内などを掲示します。

☐ 声出し・練習

開始前に担当者で顔を合わせて声を出し、プログラムの流れの確認をします。

☐ 絵本・道具の最終確認

事前に用意しておいた絵本や道具が全てそろっているか確認します。

会場では、子供の手が届かない場所に置きましょう。

おはなし会の日に気をつけたいこと

感情や体調の乱れは、自身が思っている以上に声やしぐさに表れます。おはなし会の当日までにしっかりと調子を整えておきましょう。

また、おはなし会の日は、できるだけ動きやすい服装を心がけます。短いスカートや胸元が大きく開いた服などを避け、子供の目を引くようなものはできるだけ身につけないようにします。場合によっては、ネームプレートなども外しておきます。

おはなし会の進め方

受付

事前申込制または登録制であれば、名前を確認して受付を行います。当館では、子供の名前のシールを用意しています。シールを参加者に身につけてもらおうと、担当者は会の間に名前を呼びかけやすく、子供たちは会に参加する気持ちが高まるようです。

開始前に、参加者の年齢に合わせてストーリーが短めの絵本を会場に用意しておく、開始時間まで子供たちが退屈せず過ごすことができます。

おはなし会を始める・進める

時間になったら、会で読まない絵本などは片づけます。このとき、子供にうまく声をかけて一緒に片づけをすると、子供が会に主体的に参加するようになります。

参加者には、円形や扇形など、担当者の顔がよく見える形で座ってもらいます。わらべうたで遊ぶ際に参加者同士がぶつからないように、適切な間隔を空けるよう声をかけましょう。

参加者が落ち着いたら、会を始めることをはっきりと伝え、最初のわらべうたを歌って始めます。

一つのわらべうたは、参加者が^{ふし}節や遊び方をつかんで楽しめるようになるまで何回か繰り返し歌います。その際、間髪入れずに続けるのではなく、子供がそのわらべうたを受け止めるための小休止を挟みながら繰り返します。

絵本を取り出すと、担当者の近くに子供が集まってきますが、一人一人に声をかけ、座らせてから読みましょう。途中で立つ子供がいれば、読み聞かせの流れを損なわないよう気をつけながら、座るように促します。

読み終わった絵本や使い終わった小道具は、子供が気持ちを切り替えられるよう、子供から見えないところにしまします。

副担当がいる場合は、会場全体を見渡せる位置に待機し、主担当を補助します。子供が安全に過ごしているか気をつけ、歩き回る子供がいたら、保護者の元に導きます。副担当が主担当と声をそろえてわらべうたを歌うと、保護者も声を出しやすくなります。余裕があれば、副担当も参加者と共に歌ったり、遊んだりするように心がけましょう。

会が終わったら

終了後の連絡・案内

最後のわらべうたを歌ったら、配布物を渡し、次回の日程や連絡事項を伝えます。家庭でも読書を楽しめるよう、読んだ絵本の貸出や、関連する絵本の案内をします。

担当内での振り返り

担当者が複数いる場合、片づけが済んだら、直接顔を合わせて会の振り返りをします。

会を担当して間もないうちは、担当者は、近くにいる子供や目立つ子供に目を向けがちです。主担当・副担当それぞれの視点から見た子供と保護者の様子を共有し、会の間の出来事を詳しく知るよう心がけます。他に気がついたこと（良かった点・悪かった点など）も話しておきます。

次第に全体を見渡し、参加者の様子に気を配りながら会を進行できるようになります。とはいえ、経験を積んでも、うまくいかないことはたくさんあります。一度の失敗にとらわれず、反省を次に生かして、少しずつ良い会にしていきましょう。

記録を残す

おはなし会は1回ずつ記録を残します。記録することで反省点が明確になり、より良い会の実施に繋がります。記録をする際は、一人一人の担当者の経験を、図書館事業として継承していくという視点も重要です。当館では、次のことを記録しています。

- 日時・会場・担当者・参加人数・天候
- プログラム（予定していたもの・実際に行ったもの）
- わらべうた・絵本への参加者の反応（反応が乏しかったものも記録する）
- 会の進行や参加者との接し方などの良かった点・悪かった点
- 次回への課題

蓄積された記録は、図書館がどのようにおはなし会を行い、改善していったかを知ることができる大切な軌跡です。

記録は電子データ、ノートなどの紙媒体、どちらで保存する場合でも、担当者全体で共有しやすく、後から見返ししやすい形にしておくことが大切です。

子供と接するときの心得

ゆったりとした気持ちで臨む

乳児期の子供は、わらべうたや絵本に対して、大人よりもゆっくりと反応します。子供をよく見ず、せかせかと会を進行してしまうと、子供が楽しめず、保護者も担当者もせっかくの子供の反応に気づけません。子供が楽しむペースに合わせて、ゆったりとした気持ちで会に臨みます。子供や保護者が気に入ったわらべうたがあれば、多めに繰り返して歌います。絵本の読み聞かせの際も、子供が食い入るように見るページがあれば、ページをめくる速さを調整します。

一人一人の子供に目を向ける

大人が歌ったり、絵本を読んだりすると、子供は必ずこちらを見つめます。そのとき、視線を返し、歌いかけ、語りかけることで、子供との間にある種の信頼関係が生まれるようです。

落ち着かない様子だった子供も、視線を合わせて一緒に手遊びをしたり、「○○ちゃん、座れる？」など声かけをするうちに、会の中での過ごし方が分かってきます。「あなたを見ているよ」「あなたと一緒に歌っているよ」と、一人一人に伝えるつもりで接することで、子供は変わっていくのです。初めは走り回っていた子供が、絵本の前に座って集中できるようになったり、保護者にわらべうたの手遊びをしてあげたりする姿が見られるようになります。

こうして会の楽しみ方を知った子供は、「良い聞き手」となり、周りの子供にも良い影響を及ぼします。「良い聞き手」が楽しむ姿を他の子供もまねするうちに、会を楽しめるようになっていきます。「良い聞き手」が次々と育っていくと、会はスムーズに進行しやすくなります。

子供と遊び、楽しみ、そして学ぶ

子供はわらべうたや絵本を楽しんでいるとき、その喜びを全身で表現します。担当者の膝の上に乗って一緒にわらべうたを歌う子供もいれば、わらべうたのお気に入りの言葉をひたすら繰り返しながら歩き回る子供、保護者のそばで穏やかに楽しむ子供もいます。一人一人のわらべうたや絵本の楽しみ方に興味を持ち、共に遊び、楽しみながら学ぶ姿勢を持ちましょう。

子供は気まぐれだと知っておく

おはなし会に慣れた子供でも、いつも同じように集中するわけではありません。帰りがったり、歩き回ったり、大声で泣いたりすることもあります。そのときには、子供は気まぐれだということを思い出します。子供の気分にはムラがあるのは、当たり前のことなのです。適度に声をかけたり、保護者の元に誘導したりしながら、子供が会の輪の中に戻れるよう促してみましょう。

プログラムはあくまで目安

担当者が慣れないうちは、事前に考えたプログラムをこなすことに執心しがちです。プログラムは一つの道しるべではありますが、絶対に変えてはならないものではありません。参加者の様子に目を向け、共に楽しんでいく中で、多少の変更があっても構いません。

例えば、興奮気味の子供がいるときは、エネルギーを発散させるために大きな動きのある遊びや、くすぐりのある遊びを取り入れたり、落ち着かせるために子守歌を入れたりします。

保護者への働きかけ

子供が安心して参加し、おはなし会を楽しむためには、保護者への働きかけが不可欠です。子供と大人が共に満足することが、継続的な参加につながります。

乳幼児おはなし会の趣旨を知ってもらう

会に参加する保護者の姿勢は様々です。担当者が子供の面倒を全て見てくれると考える人もいれば、担当者が話すことを、学校の授業のように一言一句聞き逃すまいとする人もいます。子供と保護者がゆったりと楽しめるよう、当館では、初めておはなし会に参加する保護者に次のように伝えています。

- この会では大人と子供がわらべうたを歌って遊び、絵本の読み聞かせを楽しむことを大切にしています。
- 子供が歩き回ったり、集中できなかったり、泣いたりすることを気にする必要はありません。子供は基本的に自由にさせてください。ただし、危ないことをしているときには手を差し伸べてください。
- 続けて参加することで、子供が会に慣れて変化が現れ、成長を実感できると思います。
- 習い事ではないので、全てのわらべうたを覚える必要はありません。子供が気に入るわらべうたがあれば、ご家庭で繰り返し歌ってあげてください。

保護者を安心させるアプローチ

保護者が緊張していると、子供も緊張します。特に初めての参加のときには、様子が分からず、表情が硬くなっていることが多いので、まずは保護者の緊張をほぐすことが何よりも大切です。

保護者と会話する

受付から開始までの間に会話を交わすことで、保護者の様子は変わります。こわばった表情が和らぎ、声が穏やかになります。相手の様子をよく見て、子供の年齢や名前のことなどをきっかけに会話をしてみましょう。

会の後など時間のあるときに、できるだけ子供の反応を担当者と保護者とで分かち合うよう心がけます。「○○ちゃん、この遊びが好きなんですね」などの素朴な感想でも、担当者が伝えると、保護者はとても嬉しそうな表情になります。

保護者の不安を和らげる

保護者の中には、子供が絵本の前に立ちはだかったり、会の途中でぐずったりしていると、「邪魔をしている」「自分の子供だけがうまくできない」と落ち込んでしまう人もいます。子供はそれぞれのペースで、徐々に会に慣れ、楽しみ方を知っていきます。保護者には、子供にとって自然な行動だということや、他の子供と比べなくても良いということを伝えます。

歩き回る子供の保護者には、子供が危険なことをしているときに手を差し伸べてほしいこと、それ以外のときは気を楽しんで見守っていて良いということを伝えます。

ぐずってしまう子供の保護者には、まずは、子供が泣くことを気にしなくても良いと伝えます。どうしても泣き止まず、保護者が退出したい様子であれば、一度会場を出て、気分転換してもらうのも良いでしょう。空腹やおむつ替えなど、泣いている原因がはっきりしている場合もあります。いずれの場合も保護者が気負わず出入りできるよう、声かけをします。

おはなし会の参加者から継続的な図書館利用者へ

参加者がおはなし会を楽しみ、図書館で過ごす時間を良いものだと感じることは、図書館にとって大きな収穫です。機会を捉えて、会の時間以外にも継続的に図書館を利用してもらえるように工夫しましょう。利用案内やブックリストの配布、利用者カードの作成のほか、図書館の魅力を伝える方法はたくさんあります。

図書館の「頼れる人」「頼れる蔵書」を紹介する

参加者の中には、図書館で本に関わる相談ができることを知らない人もいます。担当者が「絵本選びに迷ったら、声をかけてくださいね」と伝えるだけでも、保護者は読書相談をしやすくなります。

また、相談に応えるのはもちろんのことですが、保護者が知りたいと思っていることを引き出す姿勢も大切です。保護者から子供の好きなものの話を聞いたら、関連する絵本を紹介したり、育児に関する悩みごとを聞いたら、共感を示しつつ、育児関連の資料を紹介したりできます。いつでもスムーズに資料紹介ができるように、乳幼児サービスに携わったら、絵本だけでなく、育児や子供の発達についても日頃から知識を蓄えておきます。

蓄えた知識を活かし、ミニ展示で資料を紹介するのも良いでしょう。当館では、参加者から受けた相談をヒントに、育児に関するおすすめの本と雑誌を厳選したコーナーを利用者の目に入りやすい場所に設置しました。すると、参加者だけでなく、多くの子育て世代の利用者に資料が手に取られるようになりました。

おはなし会をきっかけに、図書館司書や図書館の蔵書が、頼りになる存在であることをぜひ知ってもらいましょう。

図書館内を見てもらう

幼い子供を連れた利用者の中には、児童書エリア以外に立ち寄りにくいという人もいます。けれども、子育て中の利用者に役立つ資料は児童書エリア以外にもたくさんあります。当館では、登録制おはなし会のプログラムの中で、館内を案内する日を設け、知ってもらいたいサービスや資料を紹介しています。乳幼児向け絵本がある場所はもちろん、育児やわらべうたに関する資料がある場所も実際に見てもらおうと、それらの資料が保護者によく利用されるようになります。

おはなし会が終わってからも過ごしやすい空間を用意する

可能な限り、おはなし会の終了後も参加者がゆっくり過ごせるようにしましょう。おはなし会を行う場所が閲覧室とは別の部屋であれば、絵本を用意し、参加者が気兼ねなく読み聞かせを楽しんだり、参加者同士が交流したりできるようにします。

当館は、閲覧室でおはなし会を行っているため、会が終わると片づけに取りかかりますが、参加者があわてて退出しなくても良いように、「ゆっくり過ごしてくださいね」と伝えています。片づけをしながら保護者と話している間に、絵本やわらべうたに関する相談を受けることもよくあります。

都立多摩図書館の実践から登録制乳幼児おはなし会

都立多摩図書館では、登録制の乳幼児おはなし会を行っています。ここでは、その概要と実践事例を紹介します。

乳幼児おはなし会の歩み

当館では平成15(2003)年度に0歳から3歳までの子供とその保護者を対象に、「小さな人のおはなし会」という乳幼児おはなし会を開始しました。平成19(2007)年度に、このときの実践を『乳幼児おはなし会実施の手引き』として手刷りの冊子にまとめました。

当初は自由参加制の会を毎週行っていましたが、次第に参加者数が不安定になり、継続的な参加者が減っていきました。参加者が安定しないことで、担当者も着実に実践を重ねられない状況が続きました。

このことを契機に、乳幼児おはなし会の目的と実施形態を見直すことにしました。そして、わらべうたと絵本を続けて楽しむことで、乳幼児がどのように成長するのかをより深く知るために、また、保護者にわらべうたや絵本の読み聞かせを子供と楽しむことの良さを知ってもらうために、平成23(2011)年度から登録制おはなし会「ウリボウのへや」を開始し、実践を重ねていきました。

平成29(2017)年1月、国分寺市へ移転する際に、図書館近隣に乳幼児のいる世帯が多いことや、年齢・月齢によって楽しめる内容に違いがあることなどを考慮し、登録制おはなし会を2クラスに分けました。0歳3か月から1歳半までの「わらべうたの会」、1歳半から3歳までの「ウリボウの会」です。これにより、参加する子供の年齢・月齢に合わせてわらべうたや絵本を選びやすくなりました。

概要（平成29年度から令和元年度までの実施方法）

対象年齢・内容

わらべうたの会（0歳3か月から1歳半まで※）

わらべうた中心（年度の後半から絵本の読み聞かせも少し取り入れる）

ウリボウの会（1歳半から3歳まで※）

わらべうたと絵本の読み聞かせ

定員

各クラス20組40人程度

（毎年度募集し、応募者多数の場合は抽選で参加者を決定する）

実施方法

登録制（4月から翌年3月までの1年間）

開催日時

隔週水曜日（月に2～3回）

わらべうたの会 午前10時30分から11時10分まで

ウリボウの会 午前11時20分から正午まで

場所

「こどものへや」内の絵本コーナー「えほんのこべや」

担当者

児童青少年資料担当職員3名（通年）

※いずれも4月1日時点の年齢・月齢。1歳半前後の子供は、保護者と相談しながらどちらの会にするかを決める。

登録制乳幼児おはなし会を実施して見えてきたこと

参加者の変化

同じ子供の様子を1年間見るので、子供の変化を詳しく知ることができます。多くの子供は、初めて参加したときは、わらべうたや絵本をどのように楽しんだら良いか分かりませんが、続けて参加することで、場や周囲の人に慣れ、わらべうたや絵本に親しんでいきます。

保護者もまた変わっていきます。初めて会に参加する保護者の多くは、緊張した表情を浮かべています。しかし、回を重ねて、我が子がわらべうたや絵本を楽しむ姿を見ると、保護者も子供と共に楽しめるようになります。自分の子供だけでなく、周りの子供の様子を見られることも、保護者の楽しみの一つになっていきます。「会に参加して、他の家の子供もかわいいと思えるようになった」という保護者もありました。

そして、一人一人の参加者だけでなく、会全体も変わっていきます。参加者同士が打ち解けると、リラックスした雰囲気になります。さらに、保護者全員で子供たちを見守り、共に会を楽しもうという空気が生まれます。例えば、子供が泣いているときに周囲の保護者も一緒になってあやしたり、子供同士の揉め事があった際にフォローに入ったりする様子が見られます。

⇒p.40「参加者の変化の事例」

家庭での楽しみ方

登録制の会では保護者と身近に接することができるため、家庭でのわらべうたや絵本の楽しみ方を知る機会が多く得られます。会の前後に保護者と話していると、「子供が「とうきょうとにほんばし」の動きをできるようになったんですよ」、「車の絵本がブームで、家でずっと読んでいます」など様々なことを教えてもらえます。

会の前後は話を聞ける時間が限られますが、参加者全員に対してアンケートを行うと、家庭での様子をより詳しく知ることができます。当館のアンケートでは、おはなし会の間は集中していない様子の子供が、家庭では会で紹介したわらべうたと絵本を楽しんでいることや、「寝るときに「ぜんぜがのんの」を歌う」、「お風呂で「こりゃどこのじぞうさん」を歌う」など、参加者の暮らしの中にわらべうたが溶け込んでいることが分かりました。

着実に経験を積める環境の大切さ

同じ子供たちとおはなし会を続けるうちに、担当者はそれぞれの子供の成長や、一つのわらべうたに見せる子供たちの反応の変化を見ることができます。子供たちの好みも分かってきます。そのため、会に参加する子供たちの成長段階に合わせて、子供たちが好むわらべうたや、好きなものが登場する絵本などを選んでプログラムを考えることができます。実践を重ねるうちに、乳幼児がどのようなわらべうたや絵本をどのように楽しむのかを深く知ることができます。

これに加えて、登録制の会では必ず一定数の参加があるため、安定的におはなし会を実施でき、担当者は着実に経験を積むことができます。

当館のおはなし会で工夫していること

参加者が継続して参加する楽しみを味わえるよう、また、会で紹介したわらべうたや絵本に家庭でも親しむことができるよう工夫しています。

自己紹介

年度の最初に、子供の名前、年齢・月齢、住んでいるところを差し支えない範囲で保護者に紹介してもらいます。初対面の保護者同士の会話のきっかけになっているようです。

出席シール

受付には、参加した日にシールを貼っていく出席表を使います。1歳半から3歳までの子供が参加するウリボウの会では、子供が自分でシールを貼ります。年度の初めは、シールが指から離れなくなったり、見当違いのところに貼ったりしますが、だんだんうまく貼れるようになり、年度の終わりには、自信を持ってシールを貼れる子供が多くなります。子供の成長を実感できるこの受付の様子は、保護者にとっても喜ばしいもののようです。

おたのしみの折り紙

毎回、会の終盤に、「えんやらもののき」を歌いながら、季節に合った折り紙を子供に配ります。ごく幼い子供でも、何かを受け取るというのは嬉しいことのようです。成長してくると、「今日はなんの折り紙かな」と期待の表情を浮かべます。

参加者にはあらかじめ折り紙を貼る台紙を渡しています。折り紙をもらえるのは出席した回のみで、参加すればするほど台紙が埋まっていきます。



配布物

会が終わった後に、その日のプログラムと、会で取り上げたわらべうたや絵本の紹介プリントを配っています。絵本のプリントには、書誌情報やあらすじの他に、関連するテーマの絵本も載せています。また、年に数回、担当者から見た子供たちの変化や、わらべうたや絵本に関するコラムを書いた会報を配布しています。



当館のブックリストの紹介

参加者には必ず、子供との絵本の楽しみ方や、おすすめの絵本を記した保護者向けの当館作成冊子『しずかなひととき』を配布しています。特に伝えたい内容を説明した後、冊子で紹介している絵本の配架場所を案内しています。

都立多摩図書館のプログラム例

♪…わらべうた・手遊び 『』…絵本 ○…資料編で紹介しているもの

わらべうたの会 春のプログラム 0歳3か月から1歳半まで（4月1日時点）

○♪おちゃをのみにきてください	手拍子を打つ
○♪コープロ	優しく頭をなでる
♪ひとりきな	布を配る
○♪ジー、ジー、バー	布で遊ぶ
○♪にぎり、ぱっちり	布で遊ぶ
○♪いちり	寝かせてくすぐる
○♪ずくぼんじょ	子供の体を持ち上げる（季節のわらべうた）
○♪ぜんぜがのんの	子守歌
♪えんやらもものき	折り紙を配る
○♪さよならあんころもち	餅を丸める動きをする

当館では、いつも必ず歌うおなじみのわらべうたが3つあります（わらべうたの会・ウリボウの会共通）。会の始まりには「おちゃをのみにきてください」、折り紙を配るときには「えんやらもものき」、終わりには「さよならあんころもち」を歌います。

1年間のおはなし会が始まったばかりの季節で、首が座ったばかりの子どもいれば、つかまり立ちを始めている子どももいます。

言葉を話す前の子供がほとんどなので、保護者が子供の体に触りながら、優しく声をかけるわらべうたを中心としたプログラムにしています。また、初めてわらべうたを歌う保護者も多いことから、複雑でないものを選びます。

道具にはシフォン生地 of 布を使います。「ジー、ジー、バー」は、いないいないばあ遊びを楽しめる定番のわらべうたです。「にぎりぱっちり」は、両手に隠した布をひよこに見立て、わらべうたに合わせて登場させます。子供たちは、手の中から布が出てきて膨らむ様子を喜びます。「ずくぼんじょ」は、発達に合わせて、遊び方を変えるように伝えます。首がしっかり座っている子供は、脇の下を持って「によき」と掲げるように持ち上げ、まだ首が安定しない子供は、しっかりと抱いた状態から少し体を持ち上げます。





ウリボウの会 春のプログラム

1歳半から3歳まで（4月1日時点）

- ♪おちゃをのみにきてください 手拍子を打つ
『もうおきるかな?』（まつのまさこ ぶん やぶうちまさゆき え 福音館書店）
『サンドイッチサンドイッチ』（小西英子 さく 福音館書店）
- ♪コープロ 優しく頭をなでる
♪ひとりきな 布を配る
- ♪にぎり、ぱっちり 布で遊ぶ
♪うえからしたから 布で遊ぶ
- ♪おちょづ 様々なしぐさをする
- ♪ずくぼんじょ 子供の体を持ち上げる（季節のわらべうた）
- ♪ぜんぜがのんの 子守歌
『しゅっぱつしんこう!』（山本忠敬 さく 福音館書店）
♪えんやらもものき 折り紙を配る
- ♪さよならあんころもち 餅を丸める動きをする

わらべうたの会と同じく、初めてわらべうたを歌う保護者が多いことを意識して、大人が優しく呼びかけるものと、簡単な動きのあるものを取り入れます。「にぎり、ぱっちり」は、わらべうたの会とは少し楽しみ方を変えて、子供たちからリクエストを聞き、ひよこを他の動物に変えて歌います。一緒に鳴き声を考えるなど、担当者と子供でやりとりを楽しみます。

まだ絵本に慣れていない子供が多い年度の初めは、ごく簡潔で親しみやすい絵本や、長く読み継がれている絵本を中心にプログラムを組みます。この日は、動物、食べ物、乗り物と、子供が好むテーマをバランスよく取りそろえました。『もうおきるかな?』は、表紙と裏表紙の絵が対になっているので、読み終えたら裏表紙もしっかり見せます。『サンドイッチサンドイッチ』は、最後まで読み通してから、でき上がったサンドイッチのページを一人一人に見せて回ると、目を輝かせて見つめる子供や、手を伸ばして食べるまねをする子供がいます。『しゅっぱつしんこう!』は、30年以上読み継がれている乗り物絵本です。スピード感のある電車の絵や、歯切れの良い文章、「しゅっぱつしんこう!」の繰り返しが、読み聞かせに慣れていない子供も引きつけます。



わらべうたの会 夏のプログラム

- | | |
|-------------------|------------------------|
| ○ ♪ おちゃをのみにきてください | 手拍子を打つ |
| ♪ ボウズ | 優しく頭をなでる |
| ○ ♪ ぽっつんぽっぽつあめがふる | 手のひらをくすぐる |
| ♪ そうめんや | 腕全体をくすぐる (季節のわらべうた) |
| ○ ♪ おちょず | 様々なしぐさをする |
| ○ ♪ ぎっこんばっこんもののき | 船こぎの動きをして遊ぶ |
| ○ ♪ こりゃどこのじぞうさん | 子供を持ち上げて揺らす (季節のわらべうた) |
| ♪ ゆうなのきのしたで | 子守歌 (季節のわらべうた) |
| ♪ えんやらもものき | 折り紙を配る |
| ○ ♪ さよならあんころもち | 餅を丸める動きをする |

足腰がしっかりして、自分で座ることのできる子供が増えてきます。比較的月齢の高い子供は会場を自由に動き回ります。

春に歌ってきたような子供に優しく触れるわらべうたに加え、くすぐりのある歌や、動きのある歌を少しずつ増やしていきます。「ぎっこんばっこんもののき」などの船こぎ遊びは、しっかりと上体を抱えた状態で遊びます。

「おちょず」は、たっぷりと歌を聞かせたり、しぐさを見せたりして楽しめます。1歳未満の子供は、メロディのある歌にとっても敏感に反応します。しぐさをまねすることができなくても、声のする方をじっと見つめます。子供によっては、部分的にしぐさをまねすることもあります。

季節に合わせて、夏らしいわらべうたも取り入れていきます。「ゆうなのきのしたで」は、鹿児島県大島伝承のメロディに歌詞をつけた、南国の雰囲気を十分に味わえる子守歌です。



ウリボウの会 夏のプログラム

- ♪ おちゃをのみにきてください 手拍子を打つ
『からだがかゆい』(岩合日出子 ぶん 岩合光昭 しゃしん 福音館書店)
『ひまわり』(和歌山静子 作 福音館書店)
- ♪ ぽっつんぽっつんあめがふる 手のひらをくすぐる
♪ ニューメン, ソーメン 腕全体をくすぐる(季節のわらべうた)
- ♪ おちょず 様々なしぐさをする
- ♪ うまはとしとし 子供を膝に乗せて揺らす
- ♪ こりゃどこのじぞうさん 子供を持ち上げて揺らす(季節のわらべうた)
♪ ゆうなのきのしたで 子守歌(季節のわらべうた)
『うさこちゃんとうみ』(ディック・ブルーナ ぶん・え いしいもこやく 福音館書店)
- ♪ えんやらもものき 折り紙を配る
- ♪ さよならあんころもち 餅を丸める動きをする

参加者が会に慣れてきた頃です。動きたい盛りの子供たちにも喜ばれるくすぐりや、自分でまねをして楽しい動き、大きな動きのあるわらべうたを多めに取り入れました。特に、「うまはとしとし」は、1年を通して長く楽しめるわらべうたで、子供たちに人気です。

絵本は、興味の幅が広がってきた子供におすすめの、夏らしさをたっぷり味わえるものを選びました。『からだがかゆい』は、虫に刺された実体験と重ねて「かゆい」気持ちを楽しめる写真絵本です。幼い子供は物の形が捉えづらいため、被写体の背景まで写った写真絵本は、子供の成長に合わせて取り入れます。『ひまわり』は、縦開きの絵本です。本ののどをしっかりと持って安定させ、上のページがめくれてこないように押さえるなど、事前に読み方を練習します。『うさこちゃんとうみ』は、短いながらも、子供が安心して楽しめる「行って帰ってくる」形の物語になっています。本格的な物語への橋渡しにぴったりです。



わらべうたの会 秋のプログラム

- ♪ おちゃをのみにきてください 手拍子を打つ
- ♪ はなちゃんりんごを 顔を触る（季節のわらべうた）
- ♪ ととけっこう 指人形を起こす
- ♪ オヤユビネムレ 指人形を使って遊ぶ
- ♪ どうきょうとにほんばし 腕全体をくすぐる
- ♪ おちょず 様々なしぐさをする
- ♪ おすわりやす 子供を膝に乗せて揺らす
- ♪ ねんねこせ、おんぼこせ 子守歌
- 『もこもこもこ』（たにかわしゅんたろう さく もとながさだまさ え 文研出版）
- ♪ えんやらもものき 折り紙を配る
- ♪ さよならあんころもち 餅を丸める動きをする

会のスタートから半年が経ち、子供たちが著しく成長する時期に差しかかりました。子供の多くは、ハイハイをしたり歩いたりして、会場を動き回ります。好奇心旺盛な子供たちも楽しめるよう、くすぐりや大きな動きのあるわらべうたを取り入れました。この頃には、毎回繰り返し楽しむわらべうたに、子供も保護者もずいぶんと馴染んでいます。子供の成長に伴って、わらべうたの楽しみ方も変わってきます。夏からおなじみの「おちょず」は、子供によっては、しぐさをまねして楽しみ始めます。「オヤユビネムレ」は、担当者が、手袋で作ったぶたの指人形を手にはめ、指を一本ずつ折り曲げながら子供たちに見せて歌います。保護者が子供の手を取って、同じ動きをさせてあげても楽しめます。

夏の終わりから秋の初めには、ごく短い絵本を少しずつ取り入れます。子供はまだ集団で絵本を楽しむことに慣れていませんから、まずは子供と1対1でじっくりと読むのにおすすめの絵本として、保護者に紹介する気持ちで読みます。



ウリボウの会 秋のプログラム

- ♪おちゃをのみにきてください 手拍子を打つ
『おつきさまこんばんは』(林明子 さく 福音館書店)
『おちばのしたをのぞいてみたら…』(皆越ようせい 写真と文 ポプラ社)
- ♪ととけっこう 指人形を起こす
- ♪いっちくたっちく 指人形を使って遊ぶ
- ♪オヤユビネムレ 指人形を使って遊ぶ
- ♪とうきょうとにほんばし 腕全体をくすぐる
- ♪おちょず 様々なしぐさをする
- ♪うまはとしとし 子供を膝に乗せて揺らす
- ♪ねんねこせ, おんぼこせ 子守歌
『おおきなかぶ』(A.トルストイ 再話 内田莉莎子 訳 佐藤忠良 画 福音館書店)
- ♪えんやらもものき 折り紙を配る
- ♪さよならあんころもち 餅を丸める動きをする

参加者がお気に入りのわらべうたと一緒に声を出して楽しんでもくれるようになります。年度の折り返しの時期のため、これまでに繰り返して歌ってきたわらべうたを中心にプログラムを考えました。ウリボウの会の子供たちは「オヤユビネムレ」を自分の手でまねしようとします。

絵本は、組み合わせて季節感を出します。『おつきさまこんばんは』を読んでいるとき、子供はおつきさまの表情を読み取って、悲しんだり、喜んだりします。はっきりした色合いの絵本ですが、おつきさまの表情が遠くからは見えづらいので、大人数の会の場合は他の絵本にした方が良いでしょう。『おちばのしたをのぞいてみたら…』は、全ての文章を読まずに、かいつまんで読みます。当館では隣の公園で落ち葉を踏みしめてから来館する子供が多いため、実感を伴って楽しめるようです。『おおきなかぶ』は、「うんとこしょ どっこいしょ」と一緒に言ってくれる子供が多く、盛り上がります。



わらべうたの会 冬のプログラム

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| ○ ♪ おちゃをのみにきてください | 手拍子を打つ |
| ♪ アンコ, ジョージョー | 顔を触る |
| ♪ ひとりきな | お手玉を配る |
| ○ ♪ あずきっちょ | お手玉で遊ぶ |
| ○ ♪ もちっこやいて | お手玉で遊ぶ (季節のわらべうた) |
| ○ ♪ おちょづ | 様々なしぐさをする |
| ♪ カッテコ, カッテコ | 寝かせて足を動かす (季節のわらべうた) |
| ♪ おすわりやす | 子供を膝に乗せて揺らす |
| ○ ♪ ぜんぜがのんの | 子守歌 |
| ○ 『くだもの』 (平山和子 さく 福音館書店) | |
| ♪ えんやらもものき | 折り紙を配る |
| ○ ♪ さよならあんころもち | 餅を丸める動きをする |

子供たちはすっかり場所に慣れて自分で動き回ようになります。どの子供も、お気に入りのわらべうたによく反応します。1年間続けて繰り返し楽しんできたものや、動きのあるもの、季節感のあるものなどを織り交ぜてプログラムを組み立てました。

「あずきっちょ」は、担当者や保護者が頭にお手玉を乗せ、歌に合わせて落とし、子供に見せます。月齢が高い子供は、自分の頭に乗せようと一生懸命になります。「カッテコ, カッテコ」は寝かせた子供の足を持ち、膝を曲げ伸ばしさせて楽しみます。立っている保護者の足の甲に子供を立たせ、手をつないだ状態で、リズムに合わせて歩くという遊び方もあります。

絵本『くだもの』は、読み手が一人一人の前へ絵本を持っていき、果物を口元に持っていくしぐさをします。食べるまねをする子供もいれば、読み手に興味を持つ子供もいます。保護者には、絵本を通じて、子供に語りかけて楽しめることを伝えます。



ウリボウの会 冬のプログラム

- ♪おちゃをのみにきてください 手拍子を打つ
『りんごがころん』（中川ひろたか 文 奥田高文 写真 ブロンズ新社）
『どうすればいいのかな?』（わたなべしげお ぶん おおともやすお え 福音館書店）
- ♪はなちゃんりんごを 顔を触る（季節のわらべうた）
- ♪ひとりきな 歌に合わせてお手玉を配る
- ♪あずきっちょ お手玉で遊ぶ
- ♪もちっこやいて お手玉で遊ぶ（季節のわらべうた）
- ♪おちょず 様々なしぐさをする
- ♪おせよおせよ 手や肩で押し合う（季節のわらべうた）
- ♪ぜんぜがのんの 子守歌
『かじだ、しゅつどう』（山本忠敬 さく 福音館書店）
- ♪えんやらもものき 折り紙を配る
- ♪さよならあんころもち 餅を丸める動きをする

子供たちは、繰り返し親しんでいるわらべうたを自ら歌います。わらべうたの会と同様に様々な内容を織り交ぜてプログラムを組み立てました。「あずきっちょ」は、子供が自分の頭にお手玉を乗せたり、保護者の頭に乗せようとしたりと、わらべうたの会とは少し違った楽しみ方をします。「もちっこやいて」は、お手玉を餅に見立てて遊びます。餅につけたいものを子供に聞くと、「あんこ」や「のり」など、次々とリクエストしてくれます。

絵本は、わらべうたに合わせて、りんごや餅が登場する『りんごがころん』を読みます。声に出して読むと擬音語の響きがとても心地良い絵本です。『どうすればいいのかな?』は、自分で靴を履き、服を着始めた頃の、生活体験が豊かになってきた子供に喜ばれます。初めはくまくんのおかしな格好にくすくす笑いをしていた子供も、「どうすればいいのかな?」の問いに対して、真剣に考えて自分なりの答えを返してくれます。『かじだ、しゅつどう』は、少し緊迫感のある乗り物絵本です。乗り物好きの子供はもちろん、それ以外の子供も引きつけられて、よく聞いてくれます。

参加者の変化の事例

Aくんの場合

1年目（1歳1か月） わらべうたの会

好奇心旺盛なAくんは、初めの頃は会場内を歩いては、お母さんに強く引き止められたり、叱られたりしていました。担当者がお母さんの厳しい表情に気づき、「Aくんは自由にして、お母さんも気楽にどうぞ」と伝えようと、お母さんは少し肩の力が抜けたようでした。

Aくんは、眠たいときや疲れたときなどには、お母さんも驚くほどの激しさに泣き出すことがありました。それでも「ぜんぜがのんの」や「ねんねこせ、おんぼこせ」などの子守歌をお母さんに優しく歌ってもらくと、徐々に落ち着くようになりました。ときにはすっかり泣き止んで、お母さんにぎゅっとしがみつき、気持ち良さそうにする姿も見られました。

会に慣れてくると、Aくんにもお気に入りのわらべうたができました。くすぐりのある「とうきょうとにほんばし」や、大人の膝に乗って体を揺らしてもらう「おすわりやす」などのわらべうたが聞こえると、歩き回っていたAくんが欠かさずお母さんの元に戻ってきて楽しむようになったのです。特に「おすわりやす」が大好きで、お母さんに揺らしてもらうだけでなく、自ら弾みをつけて遊んでいました。そして、少しずつ、お母さんのそばで会を楽しむ時間が増えていきました。

Aくんは、繰り返しわらべうたに親しむうちに、どのように歌い、遊ぶのが分かるようになりました。足からお尻までをくすぐってもらう「いちり」では、歩き回っていたAくんが、担当者の手の動きを見てくすぐられに駆け寄って来たり、大人の足の甲に乗って遊ぶ「あしあしあひる」では、お母さんに促されるより先にお母さんの足に乗ったりするようになりました。

2年目（2歳1か月） ウリボウの会

Aくんは、絵本にも興味を持つようになりました。特に、大好きな電車の絵本が登場すると嬉しそうな表情で読み手のところへやってきます。ある日、『でんしゃはうたう』を読むと、Aくんは絵本の正面で始めから終わりまでしっかりと聞いていました。その姿を見たお母さんが、Aくんの集中力に驚きの声を漏らしていたことが印象的でした。

他の絵本ではそっぽを向いてしまうこともありましたが、年度の後半になってくると、電車以外の絵本にも興味を示し、読み手の言葉を復唱して、熱心に指差しをするようになりました。短いストーリーのある絵本も、読み手の前に座って、集中して聞けるようになりました。時折我慢できず立ち上がる姿が、なんともAくんらしく微笑ましいものでした。

また、会の中でおなじみのわらべうたが聞こえてきたときの反応が、1年目の頃よりもさらに良くなりました。疲れたり、転んだりして大声で泣いていても、「さよならあんころもち」が聞こえてくると、ぴたりと泣き止み、ご機嫌な顔で大きく手を動かしてあんころもちを作ってくれます。冬頃には、自分で歌うことも大好きになりました。子守歌の「ぜんぜがのんの」や「ねんねこせ、おんぼこせ」を歌い出し、周りの大人たちを驚かせたこともあります。

Aくんのわらべうたや絵本への反応の変化に、担当者はもちろん、お母さんも驚き、喜んでいました。1年目の初めは気を張っている様子だったお母さんが、Aくんが変わっていく姿を見守り、Aくんと共に会を心から楽しんでいることが、担当者にも伝わってきました。

会のない日にも、Aくんは家族と一緒によく来館してくれるようになりました。大好きな電車の絵本や図鑑をはじめ、たくさんの本を読んでもらっている姿を見ると、これからますます読書を楽しんでくれるだろうと喜ばしく思えます。

Bちゃんの場合

1年目（0歳10か月） わらべうたの会

初めの頃、Bちゃんは、わらべうたにあまり反応を示さず、周りをじっと観察し、耳を澄ましている様子でした。くすぐりのある遊びにも表情が変わらないので、お母さんは少し不安げな顔をしていました。

けれども、夏が訪れ、Bちゃんが1歳を超えた頃になると、「とうきょうとにほんばし」のくすぐりに笑ったり、「こりゃどこのじぞうさん」で揺られると満足そうな表情を浮かべたりと、わらべうたを楽しむ様子が見え始めました。この頃になると、お母さんもリラックスして楽しめるようになったようで、ずいぶんと表情が柔らかくなりました。

秋頃に絵本を読み始めると、Bちゃんは興味を示して読み手の方に自らやってくるようになりました。しかし、すぐにお母さんの元へ戻っていきます。

年度の終わり頃には、わらべうたでお母さんと遊ぶことが大好きになりました。お母さんにたくさん遊んでもらっていた布遊びを、自分でして見せて誇らしげです。絵本への興味は日ごとに増していくようで、お母さんの膝の上で絵本を見つめる姿が見られました。

2年目（1歳10か月） ウリボウの会

Bちゃんは、わらべうたにすっかり馴染み、より楽しむようになりました。「とうきょうとにほんばし」を歌い始めると、期待の表情を浮かべ、くすぐられると大きな笑い声を上げます。子守歌は、家で普段から眠るときの歌になっているようで、会の間も歌が聞こえてくると、お母さんにぎゅっと抱きついて瞳を閉じます。生活の中にわらべうたが根づいていることを感じました。2歳を迎える頃には、「おちょづ」のしぐさを全てまねできるようになり、得意げにお母さんに見せていました。

Bちゃんは、絵本には興味があるものの、まだ読み手の前まで出ていくのは心細い様子でした。お母さんから離れて、絵本の近くまでやってきますが、少し経つと、また戻っていきます。読み手がBちゃんのところまで絵本を持っていくと、嬉しそうに見つめます。『くだもの』（⇒p.54）を読

んだときには、おいしそうな表情で食べるまねをしてくれました。ストーリーのある絵本も、お母さんのそばで真剣な顔をして聞いてくれるようになりました。

3年目（2歳10か月） ウリボウの会

Bちゃんは、会の間、自分の部屋にいるような様子でリラックスして参加するようになりました。

絵本を聞く姿勢にも変化が見られました。以前はお母さんのそばから離れると不安そうにしていたのですが、誰よりも早く絵本の前に座り、最後まで集中して聞いてくれるようになったのです。Bちゃんの姿を見て、周りの子供もまねをして座っていました。

わらべうたでは、お母さんに手遊びをしてもらう、自分で手遊びをして見せる、という楽しみ方に加えて、お母さんに手遊びをしてあげる姿が見られるようになりました。大好きな「もちっこやいて」では、「おもちに何つけて食べようか？」という担当者の問いかけに、積極的に答えてくれるようになりました。

Bちゃんは1年目、2年目、そして3年目と、静かに成長をしていきました。Bちゃんの姿を見ることで、周りの子供たちもどのようにおはなし会に参加すると楽しいのかが分かってくるようです。Bちゃんは穏やかな性格ですが、確実に会を良い方向に導いてくれる存在でした。

Bちゃんは住まいが遠いこともあり、普段、当館に通う姿は見られません。しかし、会の後には『だいくとおにろく』（松居直 再話 赤羽末吉 絵 福音館書店）のような本格的な昔話絵本をお母さんに読んでもらい、驚くほどの集中力で見入っていました。

年度の終わりには、お母さんから「子供の成長に私自身が驚く3年間でした。家でわらべうたを歌っていると、子供の方が私よりもわらべうたをよく覚えていてびっくりします」という感想が寄せられました。

Q & A

Q. おはなし会を行っているとき、歩き回る子供がいます。どうしたら集中してもらえますか。

A. 子供は興味を持ったものに近づいていきます。これは、乳幼児にとっては自然なことです。無理に元の場所に引き止めたり、叱ったりせず、危険がない限りは見守ります。子供が読み手を見たときには、興味を示している証拠です。こちらから声をかけて、一緒に手遊びをしながら、みんなの輪の中に戻れるよう促しましょう。回を重ねるうちに、子供はわらべうたや絵本にも興味を持つようになります。

保護者は「自分の子供だけが集中していない」と感じますが、子供は意外と耳を傾けているものです。「会の間、子供はわらべうたに興味がなさそうなのに、家で歌ってみると楽しんでいる」という声が保護者からはよく寄せられます。保護者には、この時期の子供が歩き回ったりすることは自然なのだということや、他の子供と比べる必要はないということを伝えると良いでしょう。

Q. 子供が泣いたりぐずったりしているときは、どのように対応したら良いですか。

A. 子供は図書館という空間や大勢の人がいる場に慣れると、ぐずることがだんだんと減っていきます。空腹やおむつ替え、その日の体調などで、どうしても泣き止まないときには、無理に引き止めることはありません。授乳室やおむつ交換台などを案内し、参加者が負担を感じることなく出入りできるようにすることも大切です。また、保護者が不安な気持ちでいると、子供もなかなか泣き止みません。あらかじめ、子供が泣くことを気にする必要はないと伝えておきます。会全体で、「子供が泣くのはお互いさま」という気持ちでいれば、しばしば泣いてしまう子供の保護者も安心して参加できます。

資料編

当館の実践から、参加者に特に喜ばれているわらべうたや絵本と、担当者が理解を深めるために役立つ本を紹介します。

わらべうた

各わらべうたの右下に歌詞の出典を記載しています。遊び方は出典と異なる場合があります。

おちゃをのみにきてください

おちゃをのみにきてください はい こんにちは
いろいろお世話になりました はい さようなら



おちゃをのみに
きてくださいと
歌いながら、手
を叩きます



はいこんにちは
で頭を下げます



いろいろお世話
になりましたと
歌いながら、手
を叩きます



はいさようなら
で頭を下げます

『にほんのわらべうた 2』福音館書店 2001年

さよならあんころもち

さよならあんころもち またきなこ



あんころもちを丸めるように
手を動かしながら歌います

『にほんのわらべうた 2』
福音館書店 2001年

コーブロ

コーブロ、コーブロ、ドノコガ カーイー？ コノコガ カーイー。



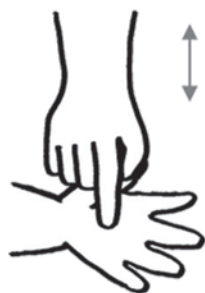
子供の頭をなでながら歌い、最後は手を止めて頭に置きます

※「コノコ」を子供の名前に変えて歌っても楽しいです。保護者へバトンタッチして、順番にそれぞれの子供の名前を入れて歌うのもおすすめです。

『いっしょにあそぼうわらべうた 0・1・2歳児クラス編』
コダーイ芸術教育研究所 著 明治図書出版 1998年

ぽっつんぽっつんあめがふる

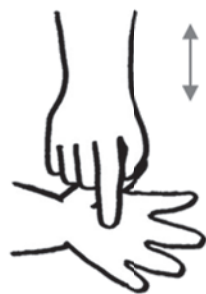
ぽっつんぽっつん あめがふる ぽっつんぽっつん あめがふる
ぽっつんぽっつん あめがふる ざあーっと あめがふる



ぽっつんぽっつんあめがふるで子供の手のひらを入差し指で真っすぐつつきます



ざあーっとで手のひらを5本指でくすぐります



あめがふるで手のひらを入差し指で真っすぐつつきます

『赤ちゃんと絵本であそぼう！』金澤和子 編著 一声社 2009年

おちよず

おちよず，おちよず，ねんねつぼ ねんねつぼ，
かいぐり，かいぐり，かいぐりこ，おつむてん，てん。（あわわわ）

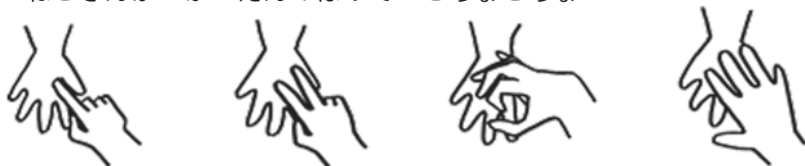


おちよずで拍子 ねんねつぼで左 かいぐりで両手 おつむてん，て 開けた口を手で
に合わせて、両 手のひらを右手 を握りこぶしに んで両手で頭を 叩き、あわわわ
手を合わせます の人差し指でつ し、糸巻きのよ 叩きます と声を出します
つきます うに回します

『いっしょにあそぼうわらべうた 0・1・2 歳児クラス編』
コダーイ芸術教育研究所 著 明治図書出版 1998年

とうきょうとにほんばし

とうきょうとにほんばし がりがりやまのぱんやさんと
つねこさんが かいだんのぼって こちょこちょ



とうきょうとで手の にほんばしで2本指 がりがりやまので ぱんやさんとで手を
ひらを1本指で2回 で2回叩きます 5本指でくすぐりま 叩きます
叩きます す



つねこさんがで手を返 かいだんのぼってで こちょこちょで脇をく
して甲をつねります 2本指で肩まで登ります すぐります

『乳幼児おはなし会とわらべうた』落合美知子 著 児童図書館研究会 2017年

いちり

いちり にり さんり しり, しり, しり



いちりで両足の
つま先をつまみ
ます



にりで両足首を
つかみます



さんりで両膝を
つかみます



しり, しり, しりで
おしりをくすぐります

『いっしょにあそぼうわらべうた 0・1・2歳児クラス編』
コダーイ芸術教育研究所 著 明治図書出版 1998年

ぜんぜがのんの

ぜんぜがのんの, ぜん, ぜん, の, ぶたんこはいらんか,
ぶたんこをかわんか?

歌いながら、子供の背を優しく叩きます

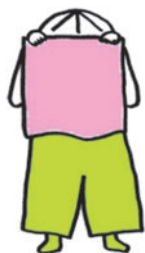
※子守歌を歌うときは、子供の頭が大人の首元に触れるようにし
て歌うと、声が気持ちよく伝わります。背中におぶって歌って
も良いです。子供がゆったりと落ち着ける姿勢で歌います。



『いっしょにあそぼうわらべうた 0・1・2歳児クラス編』
コダーイ芸術教育研究所 著 明治図書出版 1998年

ジー、ジー、バー

ジージーバー ゴーギーバー チリン、ポロン、ト トンデッター！



ジージーで、顔を
布に隠します



バーで布から顔を出
します。ここまです
何回か繰り返します



チリン、ポロン、ト
トンデッター！と言
いながら、布を飛ば
します

『わらべうたであそぼう 乳児のあそび・うた・ごろあわせ』（新訂）
コダーイ芸術教育研究所 著 明治図書出版 1985年

にぎり、ぱっちり

にぎり、ぱっちり、たてよこ ひよこ。（ピヨピヨ）



布を丸めて手で
包みます



にぎり、ぱっちり、たて
よこひよここと繰り返
し歌いながら、手を左右
にひねります



最後に「ピヨピヨ」と言
いながら手を開くと、ひよ
こが生まれるように布が広
がります

※「ひよこ」と最後の鳴き声を別の動物に変えても楽しむこともできます。

『わらべうたであそぼう 乳児のあそび・うた・ごろあわせ』（新訂）
コダーイ芸術教育研究所 著 明治図書出版 1985年

あずきっちょ

あずきっちょ まめちょ やかんの つぶれちょ

頭の上にお手玉を置き、両手を顔の横に掲げながら、拍子に合わせて顔を左右に向けます
「つぶれちょ」の「ちょ」に合わせて頭からお手玉を落とし、両手で受け止めます

※保護者が子供にやって見せたり、子供自身がやったりと、成長に合わせて楽しめる歌です。



『にほんのわらべうた 1』 福音館書店 2001年

もちっこやいて

もちっこやいて とっくらきゃして やいて
しょうゆをつけて たべたら うまかろう



もちっこやいてでお手玉などを片手の上で上下に振ります

とっくらきゃしてやいてでお手玉をひっくり返して上下に振ります

しょうゆをつけてで手の平をお手玉でなでるように動かします

たべたらで食べるまねをします

うまかろうで頬を触ります

※「しょうゆ」の部分を「のり」や「あんこ」など様々なものに変えて楽しむことができます。

『にほんのわらべうた 1』 福音館書店 2001年

ずくぼんじょ

ずくぼんじょ ずくぼんじょ ずっきんかぶって でてこらさい



「ずくぼんじょ ずくぼんじょ ずっきんかぶって」と歌いながら、両手で頭の上になぎんを作るように動かします

「でてこらさい」の最後で、わきの下に手を入れて体を持ち上げます

※体を持ち上げるときに「によきっ」「によきにょきっ」「すっぽーん！」など、音をつけてずくぼんじょ（つくし）を抜くと楽しいです。

『乳幼児おはなし会とわらべうた』落合美知子 著 児童図書館研究会 2017年

こりゃどこのじぞうさん

こりゃどこのじぞうさん うみのはたのじぞうさん
うみにつけて どぼーん



子供を抱き上げて「こりゃどこのじぞうさん うみのはたのじぞうさん うみにつけて」と歌いながら左右に揺らします

「どぼーん」で子供を水につけるように床に下ろします

『乳幼児おはなし会とわらべうた』落合美知子 著 児童図書館研究会 2017年

うまはとしとし

うまは としとし なくてもつよい

うまがつよいから のりてさんも つよい（パカッ パカッ）



脚を伸ばして座り、子供を乗せます
歌いながら拍子に合わせて膝を上下に
揺らします

※歌う速さを色々変えても楽しめます。

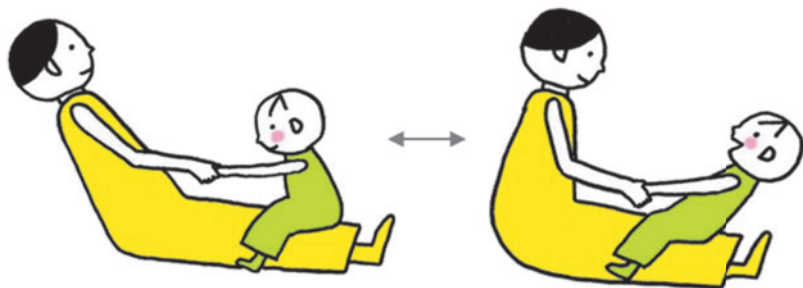


最後の「パカッ」で脚を開いて子供を
下に落とします

『にほんのわらべうた 2』福音館書店 2001年

ぎっこんばっこんもものき

ぎっこんばっこんもものき ももがなったらくんなんしょ



大人の脚の上に子供を乗せて手を繋ぎ、前後に揺れながら遊びます
「ぎっこんばっこん」で一往復。このリズムで繰り返して揺れながら歌います

※手を引き合うのがまだ難しい子供は、大人が背中や首を支えながら遊びましょう。

『うたおうあそぼうわらべうた』木村はるみ、蔵田友子 著 雲母書房 2009年

初めて絵本に出会う子供に

もこもこもこ	たにかわしゅんたろう さく もとながさだまさえ	文研出版	1977年
	言葉に合わせて体を動かしたり、思わず「もこ」と繰り返して言ったり。子供たちは不思議な世界を全身で受け止めます。擬音語と抽象的な絵だけで構成された絵本ですが、物語が生まれ、やがて終わり、また新たに始まるのが幼い子供にもちゃんと分かります。それぞれの言葉の響きをしっかりイメージして読みましょう。カバーをつけたままだと、後ろ見返しにある最後の「もこ」が見えないので、注意が必要です。		
がたんごとん がたんごとん	安西水丸 さく	福音館書店	1987年
	「がたん ごとん がたん ごとん」と音を立てながら、真っ黒な汽車が走ってきます。汽車を待っているのは、哺乳瓶やコップ、スプーンなど、幼い子供にとって身近なもののばかり。汽車は順々に乗客を乗せて先へと走っていきます。とてもシンプルな絵と文でありながら、走る道のりの楽しさが伝わります。繰り返しのリズムが心地良い乗り物絵本です。		
くだもの	平山和子 さく	福音館書店	1981年
	触ったら、手に水滴がつきそうなぶどう。かぶりついたら、甘酸っぱい味が口中に広がりそうなりんご。まるで本物のようにみずみずしい絵に子供たちは手を伸ばします。くりのいがに触って「いたい」と言ったり、いちごをつまんで食べるまねをしたり、絵本から想像を膨らませていることが分かります。読んだ後に「さあ どうぞ」と、順々に食べさせるまねをして遊ぶのもおすすめです。		
いないいないばあ	松谷みよ子 文 瀬川康男 え	童心社	1967年
	ねこ、くま、ねずみなどの動物が「いない いない……」で顔を隠し、ページをめくると、「ばあ」と顔を出します。幼い子供から楽しめる単純明快な繰り返しの絵本です。最後のページは、「いない いない」と「ばあ」の絵が見開きで並んでいるので、「ばあ」をしているのんちゃんの顔を隠してから読むのも一つの手です。読む前や後に、実際にいないいないばあ遊びをしてみましょう。		
てんてんてん	わかやましずこ さく	福音館書店	1998年
	ページに広がる「てんてんてん」の模様。これは誰？ そう、てんとうむし。では「ぐるぐるぐる」は？ 次々と身近な虫が現れます。太い線でダイナミックに描かれた虫の絵と、それぞれの虫の特徴を表すリズムカルな言葉の響きが楽しい絵本です。		

資料編

たまごのあかちゃん	かんざわとしこ ぶん やぎゅうげんいちろう え	福音館書店	1993年
	「でておいでよ」と呼びかけると、「ぴっぴっぴっ」とにわとり のあかちゃんが出てきます。子供は、隠れているものが出て くる場面が大好きです。隠れているものは何だろうと考え、 期待し、知っているものに会える喜びを味わいます。この絵 本には、いないいないばあに共通する楽しみがあります。い ないないばあをするように、楽しく読んであげてください。		
どうぶつのおかあさん	小森厚 ぶん 藪内正幸 え	福音館書店	1981年
	ねこやなまけものなど、11種類の動物が自分の子供を運ぶ様 子が、写実的な絵と分かりやすい言葉で描かれています。遠 くからでもよく見える絵本ですが、動物ごとに違うしぐさや、 毛並みの違いなどは、ぜひ近くで見てもらいたいものです。 絵本の近くにきたいのになかなか出て来られない子供がいた ら、「前においで」と声をかけてみましょう。		
でんしゃはうたう	三宮麻由子 ぶん みねおみつ え	福音館書店	2009年
	電車が駅を発車して、次の駅に着くまでの様子を全て音で表 現した絵本です。電車の絵本はたくさんありますが、ここま で音に特化したものはこれが初めてではないでしょうか。「た たっ つつつつ たたっ つつつつ」という音は、口に出し てみると、たしかに電車が走る音にそっくりです。読んでい るそばから、まねして口に出す子供や、電車になったつもり で動き出す子供もいます。リズムカルに読みましょう。		
ぱんだいすき	征矢清 ぶん ふくしまあきえ え	福音館書店	2007年
	今にも良い香りが漂ってきそうな、ふっくらとしたパンの絵 が子供たちを引きつけます。たくさんの種類の中から選び、 1種類ずつトレイに載せていくという買い物の疑似体験がで きる本です。読んだ後に、どれが食べたいかを聞いて選ん でもらい、食べるまねをして遊ぶと盛り上がります。その場合は、 やりとりをするのに少し時間がかかるので、プログラムにゆ とりを持たせておきましょう。		
くらいくらい	はせがわせつこ ぶん やぎゅうげんいちろう え	福音館書店	2006年
	最初に見えるのは、黒いシルエット。「まっくら くら くら ーい くらい でんきをつけて ちょうだい」の言葉でページ をめくると、シルエットだった登場人物が、電気に照らされ て笑顔でこちらを見えています。少し年齢の高い子供は、電気 のひもを引っ張るまねをしたり、「カチッ」と合の手を入れ てくれたりします。単純な繰り返し絵本から少しステップ アップして、物語への橋渡しになるような絵本です。		

興味の幅が広がってきた子供に

きんぎょがにげた	五味太郎 作	福音館書店	1982年
	金魚鉢から逃げ出した金魚が、カーテンの水玉にまぎれたり、花になったりして、ページからページへと軽やかに逃げていきます。まじまじと絵を見つめる子供、あめ玉やおもちゃを見つけて喜ぶ子供、目ざとく金魚を見つけて指差す子供など、反応は様々。絵本に近づき、立ち上がって見に来る子供がいる場合は、声かけをして座ってもらうよう促しましょう。		
おさんぽおさんぽ	ひろのたかこ さく	福音館書店	2008年
	雨上がりに長靴をはいて歩く子供の足元をクローズアップした珍しい絵本です。どんどん歩いていく子供の足元には、だんごむし、かたつむり、かえるなど、様々な生き物が描き込まれています。おさんぽの最後は、水たまりに入り、はだしになって大あばれ。梅雨時や雨の日に読むのにぴったりの1冊です。		
しろくまちゃんの ほっとけーき	森比左志、わだよしおみ、若山憲 著	こぐま社	1972年
	50年近く読み継がれてきた絵本です。この絵本を読んでホットケーキを作った人が3世代になるほどの年月が経っていますが、今も子供たちを夢中にさせています。「ぼたあん だろ だろ ぴちぴちぴち ぷつぷつ」焼ける音が変わっていくフライパンの場面は、どの子供も大好き。出来上がるのを真剣に待っています。標題紙の前の「わたし ほっとけーき つくるのよ」も忘れずに読むと喜ばれます。		
ぞうくんのさんぽ	なかのひろたか さく・え なかのまさたか レタリング	福音館書店	1977年
	夏になると読みたくなる絵本です。会話体で進む物語は、少し絵本に慣れてきた子供向け。文のみでは状況が分かりにくいかもしれませんが、絵がそれぞれの場面の状況をよく物語っています。ぞうくんの背中にかばくん、わにくん、かめくんが順々に乗ると、聞き手の期待がどんどん高まります。最後の「うわーっ」「どっぼーん」の場面は、急いでページをめくりたくなりますが、しっかりと絵を見せてからめくりましょう。		
まるくておいしいよ	こにしえいこ さく	福音館書店	1999年
	子供の好きな丸くておいしいものが次々登場します。「これなあに」と尋ねると、当てずっぽうで答えを叫んだり、保護者と答えを相談したり、様々な反応があります。ページをめくってお菓子や果物が出てくると、当たっていても外れていても、嬉しそう。クッキーやのりまきの丸の違いに気づいたり、じっくり眺めて好きなものを選んだり、繰り返し楽しめる絵本です。		

物語を楽しめるようになった子供に

三びきのやぎのらがらどん ノルウェーの昔話	マーシャ・ブラウン え せたていじ やく	福音館書店	1965年
	物語性のあるものを楽しめるようになってきた子供にぴったりの、シンプルながら骨太なストーリーの昔話絵本です。小・中・大と大きさの違う三びきのやぎのらがらどんたちが、順々に登場して知恵を働かせ、最後はトロルをやっつけます。テンポの良い繰り返しとスリリングな展開、そして満足の良い結末が子供たちを喜ばせます。		
はらぺこあおむし	エリック＝カール さく もりひさし やく	偕成社	1976年
	おながかべっこべこのあおむしは、次々と食べ物を平らげて大きくなり、最後には色あざやかな蝶へ成長します。あおむしが食べた物に丸い穴が開く仕掛けや、リズムカルな言葉の繰り返し、子供に物語を分かりやすく伝えます。カラーズの美しく豊かな色彩は、一度見ると忘れられない魅力をもっています。仕かけの部分もスムーズにめくれるように、読む前にしっかり開きぐせをつけておきましょう。		
ちびゴリラのちびちび	ルース・ボーンスタイン さく いわたみみ やく	ほるぷ出版	1978年
	森の動物たちは、ちいさなかわいいゴリラのちびちびが大好きです。ある日、ちびちびはどんどん成長し、とても大きくなります。すると森のみんながやってきて、誕生日のお祝いをしてくれました。成長した今でも、みんなはちびちびが大好きです。動物たちのちびちびへのいとおしそうなまなざしが印象的な絵本です。ページを繰るごとに現れる迫力のある動物や、大きくなったちびちびの姿に大喜びする子供もいます。		
ぐりとぐら	なかがわりえこ と おおむらゆりこ	福音館書店	1967年
	のねずみのぐりとぐらは、森で見つけたとても大きな卵を使って、かすてらを作ります。ぐりとぐらが工夫しながら材料をそろえ、運び、おいしそうなかすてらを作り上げていく様子に、子供たちは釘づけ。おなべから黄色いかすてらが顔を出すと、手を出して食べるまねをする子供もいます。すでに知っている子供も多い絵本ですが、細やかに描き込まれた絵は、何度見ても新しい発見があり、繰り返し楽しんで聞いてくれます。		
ちいさなねこ	石井桃子 さく 横内襄 え	福音館書店	1967年
	ちいさなねこが、おかあさんねこの元を離れ、初めて一人でお出かけます。外の世界は、車や、人間の子供や、その他様々な危険に満ちていますが、最後はおかあさんに連れられて家へ帰ります。幼い子供にとっては、ちょっと外へ出かけるのも大冒険。そんな子供たちの心は、絵本にぴったり寄り添って、ちいさなねこと一緒に街を駆け抜けます。		

近くで見ても楽しい絵本



『おやすみなさいおつきさま』
マーガレット・ワイズ・
ブラウン さく
クレメント・ハード え
せたていじ やく
評論社 1979年



『ゆうびんやのくまさん』
フィービ と セルピ・ウォー
ジントン さく・え
まさきりこ やく
福音館書店 1987年



『ねずみのいえさがし』
(「ねずみのほん1」)
ヘレン・ピアス さく
まつおかきょうこ やく
童話屋 1984年

おはなし会で複数人に読み聞かせることを考えると、判型の小さな絵本や、絵が細かい絵本などはどうしても選びにくいものです。しかし、このような絵本の中にも、1対1で読めば、幼い子供から楽しめるものが多いこともあります。会の後や、家庭で読むことを勧めてみましょう。

『おやすみなさいおつきさま』は、絵の中に遊びの要素が細やかに描かれています。子うさぎの枕元に『おやすみなさいおつきさま』の絵本が置いてあったり、部屋にいるねずみがあちこち動き回っている様子が時間ごとに描かれていたり、見れば見るほど発見があります。

『ゆうびんやのくまさん』もそうです。少し年齢の高い子供は、絵の中のくまさんの家族写真などを目ざとく見つけて、くまさんは子供か大人かと問いかけてきたりします。どちらも「絵を読む」のが大好きな子供にぴったりの絵本です。

『ねずみのいえさがし』は、1匹のねずみが家を見つけ、友達を見つけ、その友達と暮らすのにちょうど良い家を見つけるまでを描いた3部作の1作目です。読者に問いかける形の繰り返しが耳に心地良く、ねずみと意外なものとを組み合わせた写真はユーモラスで、幼い子供から小学生まで、幅広い世代の子供を喜ばせます。

理解を深める本

ここでは、乳幼児おはなし会を行うに当たって、担当者がわらべうたや、低年齢向け絵本、子供の成長などについて知識を得ることができる本を紹介します。

記号の説明：**わ** …わらべうた **本** …絵本 **子** …子供の成長
♪ …音声または映像あり

まず読みたい本

わ**本****子**

『乳幼児おはなし会とわらべうた』

落合美知子 著 児童図書館研究会 2017年



わ**♪**

『にほんのわらべうた』（1～4）

近藤信子 著 柳生弦一郎 絵 福音館書店 2001年



わ**♪**

『映像で見る

0・1・2歳のふれあいうた・あそびうた』

汐見稔幸 監修 エイデル研究所 2007年



わ

『いっしょにあそぼうわらべうた
0・1・2歳児クラス編』

コダーイ芸術教育研究所 著 明治図書出版 1998年

※この他にも、コダーイ芸術教育研究所には
わらべうたに関する多数の著作があります。



わ

『あかちゃんとお母さんのあそびうたえほん』

小林衛己子 編 大島妙子 絵 のら書店 1998年



わ 子

『わらべうたと子どもの育ち』

木村はるみ 著 エイデル研究所 2019年



本

『乳幼児と絵本 中村柁子氏講演録』

中村柁子 述 東京都立多摩図書館 2004年



わ本子

『うたおうあそぼうわらべうた』

木村はるみ、蔵田友子 著 雲母書房 2009年

わ本子

『ことばの贈りもの』

松岡享子 著 東京子ども図書館 2009年

わ本

『幼い子の文学』

瀬田貞二 著 中央公論新社 1980年

子

『育児児典』（全2冊「暮らし編」「病気編」）

毛利子来、山田真 著 岩波書店 2007年

子

『子どもとことば』

岡本夏木 著 岩波書店 1982年

わ本子

『「おはなしゆりかご」の記録をめぐって』

大阪府立中央図書館子ども資料室「おはなしゆりかご」「おはなしぶらんこ」ボランティアスタッフ 2010年

東京都立多摩図書館児童青少年資料担当では、
子供の本や読書についての
御質問、御相談をお受けしております。
いつでも気軽に御利用ください。

当館作成冊子は都立図書館ホームページで
全文を公開しています。
<https://www.library.metro.tokyo.jp/>

東京都立多摩図書館
電話 042-359-4109
(児童青少年資料担当ダイヤルイン)

東京都子供読書活動推進資料

登録番号 (31) 11

乳幼児おはなし会ハンドブック

令和2(2020)年3月1日発行

編集発行 東京都立多摩図書館

〒185-8520 国分寺市泉町2-2-26

電話 042-359-4109 (担当直通)

ファクシミリ 042-359-4121